1483号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2025.3.10
〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

木幡智恵美

26

「加害者としての私の戦争体験-日本は中国で何をしてきたか-」の講演録、Y氏の「放浪の記」が続く中、新たな連載も始まった。ご自身の看護師としての体験を書かれたものだ。その他、ずっと詩を書き続けている方、地元で文筆活動を続けている方など、単発ではあるが寄稿下さり、何とか五年目も無事終えることができた。

その五年目の終わり、夕焼け通信社は移転となる。編集長の転勤で、隠岐から奥出雲に移ることになったのだ。隠岐は支局となり、様々な活動を編集長と共にしてきた方に託されることになった。編集後記の一部を掲載する。「隠岐の社屋を引き払ったのが四月一日。そして、この奥出雲の地にやってきたのが四月二日。前日から急に冷え込んだそうで山々の頂はうっすらと白くなっていました。右も左もわからぬ土地、そしてあまりの寒さと人気のない新社屋、行き当たりばったりを旨とする編集人一家も心細さに胸ふさがる思いでしたが、今はずいぶん落ち着きました」。島根県の中では海に囲まれていて割と穏やかな気候の隠岐から、盆地で寒暖の差が激しい山の中の奥出雲への移転。編集人が自分の思いで行動するのはいいが、それに付き合わされるご家族は大変だったことだろうと察する。

しかし、今回の奥出雲だけでなく、隠岐も全く新たな土地だった筈。そこでたくさんの人と出会い、たくさんの人を呼び込んで講演会を開いている。亡き伊藤ルイさんにまで足を運んでいただき、いくつかの講演録が夕焼け通信を賑わせ、多くの読者の共感を呼んだ。編集長の先輩であるY氏は勤務先の施設で劇団を立ち上げ、本土公演まで行った。さらに島後地区の障がい者に関わる五者共同の「みんなでつくる発表会」でワークショップを開いた。同人としての私も、お二人の行動力に引きずられるように、二度も隠岐の島に渡っている。（一度はひまわり号に乗って渡り、もう一度はワークショップに招かれた田島征三さんの講演を聴きに）

山奥の人気のない奥出雲の地に移っても、編集長ならそこでまた新たな人たちと出会い、様々な活動をしていくことだろうと移動の際には感じていた。ただ、昨年九十二歳で亡くなられた谷川俊太郎さんをお招きすることになるとは思いもしなかった。

人生の誰彼　29

今岡　幹

思ってたのと違った

ご案内の通り、松江イオン内の映画館が閉鎖中なので、T・ジョイ出雲まで足を運んで映画を観てきました。

T・ジョイ出雲はゆめタウン出雲店内にある山陰地方最大といわれるシネマコンプレックスです。全体的にゆとりのある造りになっていて、松江イオンにあった松江東宝5と比べはるかに快適です。特に劇場内の構造が全く異なります。東宝5は緩やかなスロープ式なので場所によっては前の席との高低差が殆ど無くてシートからはみ出した前の人の頭が邪魔で見づらくなることがありましたが、T・ジョイはスタジアムのように全体に急な傾斜がついていて、上から見下ろす形なので前席の人の存在が全く気にならなくてスクリーンに集中できるのです。

シート自体も東宝5は一時間も座っていると背中やお尻の辺りが疲れて居心地が悪くなるのですが、T・ジョイは適度なクッションのお陰か最後までゆったりと過ごせます。現在松江東宝5はイオンシネマに改装中のようで、できればこの辺りを考慮して貰えると年寄りには嬉しいのですが、看板すげ替えた程度の居抜きにならなければいいなと願っています。

さて、今回T・ジョイ出雲で観た映画は劇場アニメ『ベルサイユのばら』でした。んっ？ベルサイユのばらって、あのベルばら？・・・そうですよ、いや嗤わないでください、爺さんがベルばら観ちゃいかんという法は無いでしょう。といっても私自身の趣味ではなくリアルタイム世代ファンの妻のお相伴に預かっただけなんですが、爺さんのお供はもしかしたらお邪魔だったかもしれませんね。

物語は、フランス王妃マリー・アントワネットと近衛連隊長のオスカルを中心に様々な人間模様が交錯しながらフランス革命に雪崩れ込んでいく、みたいな感じでしょうか。何せ私は本作を観るまでオスカルが男装の麗人であることさえ知らなかったほどのベルばら初心者だったのでとても面白く感じたのですが、意外や妻の感想は「思ってたのと違った」でした。ネットのレビューでも賛否囂々渦巻いているようで、これは往年の名作のリメイク物の定めといえましょう。

同じリメイクでも自分にとっては『シン・仮面ライダー』や『ゴジラ-1.0』こそが「思ってたのと違った」作品だったので、先入観無しで観ることができたこの映画のほうがよっぽど新鮮で感動的に楽しめたことは皮肉な結果でありました。

ニュース日記　960

中村　礼治

帝国のリストラ

30代フリーター　ゼレンスキーに出される予定だった昼食はトランプが食べた。アメリカとウクライナの首脳会談の決裂を報じる朝日新聞はふたりの口論のあとの模様をそう伝えている（3月2日朝刊）。

年金生活者　「帝国」の座を降り、「自国第一」に徹することにしたトランプ政権にとって、ウクライナはかつてのアメリカ「帝国」の服属国ではもうない。ディールの相手でしかなく、助ける義理はない。

いま世界にはアメリカ、中国、ロシア、EUという、4大「帝国」がある。さらにEU内にはドイツという地域「帝国」があり、アメリカ「帝国」の中にEU「帝国」が、EU「帝国」の中にドイツ「帝国」があるという入れ子状になっている。ウクライナはEU「帝国」の服属国であると同時に、アメリカ「帝国」の服属国でもあった。

10年ほど前まではウクライナはロシア「帝国」の服属国だった。親ロシア政権がマイダン革命で倒れ、服属先をロシア「帝国」からEU、米両「帝国」に変えた。ロシアにとっては服属国を失うことは国内の統治が危うくなることを意味し、それを恐れたプーチンはウクライナを引き戻そうと侵略戦争をしかけた。

いまEUやその加盟国がトランプとは逆にウクライナ支援の継続を強調しているのは、域内の結束をはかるのにも必要だからだ。自分たちの「帝国」の服属国になったウクライナが、アメリカ「帝国」の没落によって、再びロシア「帝国」の服属国になれば、域内の統治が危うくなる。その点はロシアと事情が同じだ。

30代　「自国第一」を掲げるトランプの再登板の背景について、鈴木一人という国際政治学者が「米国にとって世界の『覇権国』であり続けることのコストパフォーマンスが悪くなり、結果的にその役目を終える段階に来ている」と語っていた（2月19日毎日新聞）。「覇権国や帝国は、自国の影響力を他国に及ぼそうとするため、『持ち出し』が多くなる」とし、「こうした『持ち出し』が多くなるが故に、全ての帝国は崩壊すると言われるが、米国にもそのサイクルが訪れたということだ」と説明する（同）。

年金　「持ち出し」という言葉を使うなら、いまトランプが矢継ぎ早にやっているのは、その大幅な削減だ。パリ協定離脱、WHO脱退、さらには海外の開発援助や人道支援をするアメリカ国際開発庁（USAID）の閉鎖などの方針を打ち出した。それらの組織はいずれも「帝国」として世界を支配するための足場の役割を担っていた。

帝国の特徴のひとつは、域内にさまざまな勢力を抱え、分権的な統治をしていることにある。中国の冊封体制にみられるように、帝国が域外に服属国を持つのは、分権的な構造によって制約を受ける中央の権力の弱点を補強するためだ。

独立性の強い州の集合体であるアメリカもまた分権的な統治の構造を備えており、そのゆえに避けられない連邦政府の弱点を補うために、服属国をつっかえ棒にした。その服属国と自国との関係に近代的な装いを凝らしたのがパリ協定やWHO、USAIDにほかならない。

アメリカを20世紀の覇権国家、すなわち「帝国」に押し上げたのは第2次産業を牽引車とする産業資本主義だ。それがポスト産業資本主義に取って代わられるとともに、アメリカはその座から降りること余儀なくされた。「持ち出し」を続ける余裕がなくなり、トランプが大リストラをやりだした。

30代　これまでアメリカが「持ち出し」をしてまで覇権国家であり続けたのはなぜだ。

年金　さっきも言ったように、そうしないと国内の統治が不安定になるからだ。実際、アメリカは世界の覇権を失っていくにつれて、国内の分断を深めていった。各州の代表で構成される2大政党の民主党と共和党はかつて互いを自由と民主主義の担い手と信じていた。それが今は相手を自由と民主主義の破壊者のように非難し合うようになった。

30代　エマニュエル・トッドが「米国はロシアに対して、非常に屈辱的な敗北を経験しつつあります」と語っている（2月26日朝日新聞朝刊）。

年金　東西冷戦で「屈辱的な敗北」を喫したソ連の敵討ちをロシアが果たしつつあるということなのかもしれない。

ソ連「帝国」が解体し、その継承国のロシアは数ある主権国家のひとつになった。プーチンは、弱体化したロシアを豊富なエネルギー資源を武器に立て直し、「帝国」として復活させた。その服属国だったウクライナをEU、米両「帝国」に奪われ、それを取り戻そうとして侵略戦争を始めたロシアをアメリカは撃退することができなかった。

30代　トッドは日本への助言を求められて「当面は、静かに、目立たないようにすべきです」と語っている。「できるだけ対立には関与しないようにして、自国の産業システムを守ることです」と（2月26日朝日新聞朝刊）

年金　何もしなくても、トランプの再登板でこれから大きな外圧が押し寄せるから、過去そうだったようにそれを利用して自らを変えればいいと言っているよう聞こえる。それは「帝国」からの外圧を避けられないできた国が身につけた知恵でもある。